

Contents

- 巻頭言『理想の図書館』 人文学部助教授 大内裕和 ……P2
経済学部助教授 松井名津 ……P3
- 『発見、私の図書館利用法』 人文学部社会学科3年 池田愛美 ……P6
人文学部社会学科4年 中村祐介 ……P6
- 私が薦めるこの一冊 経営学部講師 菊池一夫 ……P7
経営学部講師 溝上達也 ……P7
- 統計データで見る松山大学図書館 ……P8



図書館見学の案内風景

巻頭言 『理想の図書館』

人文学部助教授 大内 裕和

中・四国の私立大学図書館のなかで松山大学図書館は現在最大数の蔵書を保有している。この図書館をさらに充実させることが、大学における研究・教育活動の活性化にとって必要不可欠な条件である。ここでは主としてソフト（内容）の観点から「理想の図書館」を考えていきたいと思う。「理想」とはいつても、実現可能なレベルで提案したい。

一点目は、充実した開架図書と並べることである。現在の図書館は10万冊の配架が可能であるが、これではやはり不十分だといえる（開架スペースはすでに限界に近づいている）。ここでは大雑把であるが、30万冊～50万冊レベルを理想としたい。完全開架を実施している大学図書館もあるが、それはスペース（完全開架は巨大なスペースを必要とする）と学生利用の便宜を合わせて考えるとベストの選択肢ではないだろう。ここには現在の大学における研究と教育の統合の困難という状況も関係している。高等教育の大衆化、研究の専門分化・高度化という状況は、学部レベルで学問の先端を教えるということをはばずすべての分野において不可能としている。大学は研究と教育という二つの欠かせない機能をもっているが、この統合は大学院においては可能であっても学部においては分離せざるを得ない状況となっている。各教員は学部における講義・ゼミでは研究内容をそのまま講義するというより、その成果を学部生用にアレンジする必要に迫られているといえるだろう。そのようななかで教員の研究に必要な図書と学生の学習に役立つ図書との間には大きなギャップが存在する。重なる部分もないわけではないが、それが全く分けられずに開架に並べられることは、これから大学での学習を開始する学部学生にとって図書の選択をむしろ困難にすると考えられる。

またこの開架と閉架が分かれている条件を積極的に考えることも可能だろう。開架図書にどのような本を並べるかという場面では、学生にとってどのような本が重要であるかを選書する教員が判断する必要に迫られる。つまりここでは教員の教育に関する考え方（哲学）が強く反映することになる。すでに指定図書コーナー、推薦図書コーナー、学部基本図書コーナーという形で、学部での講義・ゼミ、学生の読書とリンクさせた選書が行なわれてきているが、さらに様々な試行錯誤を通してより優れた本を選書する努力をすることは有益だろう。情報爆発の現代、出版される本の量は膨大であり、予算とスペースが限られている以上、大学図書館では選書の能力を高めることが必須の条件であ

るからである。また開架図書の選書を通して学生にとって必要な知識・情報とは何かを考えることは、研究と教育との関連性に対する意識を高め、大学教育にとって有効性をもつと考えられる。

開架図書はまた、学生にとって必要な教養とは何かという視点から集められる必要がある。教養教育の重要性は様々なところで議論されているが、そこでの問題は現代社会における知の全体像を捉えることの困難にある。特に各学問分野の専門分化によって、知の断片化・細分化が際限なく進行している。専門が異なれば言葉が通じないという状況が、相当程度一般化しているのである。しかしそうであるからといって、今後社会に出て行く学生たちに知の全体像あるいは共通基盤を提供せずに済むということにはならない。情報化・複雑化した社会状況であるからこそ、それに対応できる教養や知が求められるからである。大学における文科系・理科系の分離や大学入試科目数の削減、個性化をスローガンとする教育改革によって進んだ高校教育の選択科目増大など、学生の共通知識が減少している現状からもそのことは強く要請されているといえる。開架図書は経済、経営、人文、法といった学部教育に関わるものばかりでなく、現代社会における知の全体像（マップ）を示せるものとなる必要がある。思いつくまを挙げれば、古典ギリシャにはじまる哲学・論理学、キリスト教・仏教・イスラム教などの宗教学、美術や音楽などの芸術、DNAやバイオテクノロジーなど発展著しい現代生命科学、人類的課題となっている地球環境学・宇宙科学などに関する文献（他にもまだまだあるが）は、欠かすことができないだろう。困難な課題であるが、現代社会にとって必要な知の概要を示すことのできる開架図書が並べられることが理想的である。

二点目には図書館が文化・情報を交流・発信する場となることである。読書や映画鑑賞というのは本来孤独な行為であるが、その経験を他人と共有し、意見を交わし合うことも重要である。とりわけ大学が教員と学生、または学生同士の知的交流を通して物の見方・考えた方を育てていく場である以上、そのことは積極的に試みられる必要があるだろう。すでに読書指導の会では教員による本を紹介するイベントが続けられているが、それに加えて学生が一つの本を一緒に輪読する読書会が盛んに行なわれることが望ましい。学生が「教わる」ばかりでなく自主的に学ぶことほど現在求められていることはないからである。読書会に加えて映画上映会、ビデオ鑑賞会なども教員・学生の自主的

なアイデアで行なわれるようになれば、図書館における文化活動・交流はさらに活発化するだろう。こうした活動をその場限りで終わらせずに活用することも考えられている。読書会や映画上映会、ビデオ鑑賞会での議論の記録を蓄積させていけば、それが松山大学図書館独自のインデックスとなる。こうしたインデックスは利用者にとって価値の高い情報であると同時に、松山大学図書館を固有の意味をもったスペースとして活性化させることにつながるであろう。これはすでに昨年からはスタートしている松山大学図書館書評賞を通して実践されている。受賞作をはじめとして優れた書評はホームページに掲載され、利用者が本を選択する際のインデックスとしての機能を果たしている。教員や学生の書評をたよりに本を探す。さらにはその書評に対して別の視点からの書評が行なわれるということもあるだろう。本の評価をめぐって議論が起こることも予想されるが、それこそが大学という場にふさわしいといえる。衛星放送の人気番組「週刊ブックレビュー」のように、共通の本をめぐって教員や学生が発表しあうイベントなども行なわれたら楽しい。こうした交流を通して得られた成果を積極的に発信する試みも考えられる。すでに教員による推薦図書一覧は冊子としてまとめられ、図書館書評賞の受賞作は松山大学のホームページ上で公開されている。それらに加えて読書会や映画上映会、ビデオ鑑賞会の成果なども様々な形で発信していくことができるだろう。このことによって松山大学図書館が文化を発信する場としての意義をもつこととなる。

三点目は図書館が地域文化の発展に貢献していくという

ことである。松山市民に対する開放など地域住民へのサービスは行なわれてきたが、それをもっと充実させていくことである。住民の高学歴化の進行や現代社会の高度化・複雑化は、地域の専門的な知・情報に対するニーズを間違いなく高めている。こうした知や情報は自治体図書館によって十分に得ることは困難であり、松山大学図書館の豊富な蔵書・コンテンツはそのニーズに応える力を間違いなくもっているといえる。このためにはまず開館時間の延長が必要である。開館時間は少なくとも欧米の大学並みに午後10時～11時まで延長されることが望ましい。一点目の開架図書の充実や二点目の文化・情報の交流・発信についても地域住民のニーズを取りいれていくことができるだろう。これについては図書館予算が学生納付金によって主に担われているという私立大学の難しさがあるが、その問題も議論を積み重ねることで解決していくことが望ましい。また読書会や映画上映会などを通して教員、学生、地域住民との間で活発な議論が行なわれることになれば、それは大学教育にとっても地域文化にとっても大きなプラスといえるだろう。今後の18歳人口の急減、生涯学習時代の進展は、松山大学において社会人を含めた成人学生が増加する可能性を高めているのであり、その点からも地域文化との関係を重視していくことは大切だと思われる。

最後に、これらを実現するにはそれを支える図書館スタッフの活動とそれをサポートする大学教員の積極的な協力が欠かせない。両者の努力と協力によって松山大学図書館が「理想の図書館」になることを私は夢見ている。

経済学部助教授 松井 名津

松山大学図書館の収容能力が限界に近づきつつある。また、マルチメディアの登場やI.T.化の進展に伴って、情報リテラシー教育の充実が求められている。この二点からだけでも、新しい総合的な図書館の必要性が高まりつつあるといっていよう。いずれ全学的な議論を重ねながら新しい図書館像が描き出されることだろうが、ここでは主として設備の観点から求められる図書館を考えていきたい。とはいえ、これはあくまでも一つのたたき台、ラフスケッチにすぎないものであって、新図書館設立にあたっては全学の英知を結集することが必要であることはいままでのことである。

まず、指摘しておきたいことは、学生の学費によって支えられる大学図書館は利用者である学生にとって使いやすく立ち寄りやすい図書館でなくてはならないということであり、そのためにも学習支援センターとしての性格をより強めて行かなくてはならないだろうということである。こ

れを念頭に置きつつ、8点ほど理想的な図書館としてふさわしい設備を考えていくことにしたい。

1. 情報コンセントの整備

インターネットの急速な普及・進展やCD-R、DVDといったニューメディアが出現してきている。こうした時代になぜ図書館機能の充実が必要なのか、という声もあるかもしれない。しかし、インターネットやニューメディアの情報は、その時点その場のフローの情報という性格が強い。一方図書や雑誌に集積された情報は、過去からのストックの情報という性格を持つ。性格の異なった情報を結合し、その中から問題を発見し、自ら解決する能力を身につけること、すなわち情報リテラシーが、これからの人材に何よりも求められていくであろう。こうした能力獲得を支援する機能を図書館は担って行かなくてはならない。ではそのために、どのような設備が必要だろうか。

近年新規増築した大学図書館の多くで、個別ブースやグ

ループ学習室で使用できる情報コンセントの整備が行われている。与えられた課題を解決するためにどのような情報を、どのような方法で収集すればもっとも効率的なのか。これが情報リテラシー教育の第一歩だとすれば、各自が自由に活用できる情報コンセントの整備とそれに見合ったセキュリティの充実は、図書館にとっても必要な設備であろう。

2. A.V.室、L.L.教室（ブース）

グローバル化の進展とともに、語学能力、異文化理解能力が求められる。こうした能力を身につけるために、集中して語学教材やビデオ等を視聴できるスペースが必要となる。視聴覚教材の利用を促進するためには、防音設備を施した独立の専用スペースが求められるだろう。

3. マルチメディアに対応した小スタジオ

しかしこれだけでは十分とはいえない。情報は所有しているだけでは価値がない財である。他者に伝え、他者と共有してこそ情報はその真価を発揮する。したがって情報発信能力を支援していく機能も必要となってくるだろう。そのためには単なるグループ学習室ではなく、ビデオ等を撮影映写できるスタジオ、特に50人程度を定員とする小規模のスタジオが必要となってくるだろう。

ゼミ単位で自己紹介ビデオを作り、互いに鑑賞し批評する。自分たちの報告風景をビデオにおさめ、相互に批評する。こうした試みを通じて、どのようにすればより分かりやすい報告になるのかを実体験を通じて身につけていくことができるだろう。慶応大学湘南藤沢台キャンパスのメディアセンターはこうした先駆的試みの例である。

こうしたスタジオは単に情報発信を支援するだけでなく、異文化理解にも力を発揮する。何を食べているのか、どんな音楽を聴いているのか、どんな風景のもとで過ごしているのか、その文化の日常風景を知ることが、異文化への関心を深めるきっかけになる。少人数で視聴した教材をもとにして、互いに感想を述べ合うことによって、さらに関心を深めていくことができよう。語学教育においても、L.L.教室で個別に学習するだけでなく、クラス単位で現実の状況を設定した会話訓練を行う、ビデオやDVDを視聴し、その感想をその言語で述べる等々、集団の中でコミュニケーション能力を磨くのに、こうしたスタジオは役に立つだろう。場合によっては、外国語で劇を創作し上演することも可能である。

少人数で視聴覚教材を共有することは、語学教育以外でも重要であろう。100人以上を収容できる大教室に、20人がバラバラに座って視聴すると、どうしても集中度が低下してしまう。少人数収容のスタジオはこういう時にも効力を発揮する。またこうしたスタジオが図書館内に設置されていることによって、教材を視聴したあと、場所を移動することなく、図書資料やネットを使用した情報収集を行うことができ、学生の興味を持続させながら、情報収集、レポート作成、ディ

ベイトにつなげていくことができるだろう。

4. 余裕のある書架スペースと個別キャレール

現在の松山大学図書館にすでに設置されている設備である。しかしそのスペースは健常者にとっては十分であっても、車いす使用者にとっては十分とはいえない。大学教育は障害の有無にかかわらずすべての人にひらかれているものであるから、障害者に対する設備面での対応が不可欠となる。

5. 開架と閉架の有機的連関＝自動化書庫の例＝

図書館の蔵書はすべて開架であるべきだとの見解もあるが、50万冊を超えると効率的な情報収集ができず、利用者が混乱するだけだとの見解もある。また、すべての蔵書を開架にできるスペースを確保できるかという問題がある。実際松山大学の敷地を勘案すれば、すべての蔵書を開架にするには相当な高層化を図る必要があるだろう（個人的にはある一定限度を超えた高層化には反対である）。閉架反対論の有力な根拠の一つに、閉架になった図書が死蔵図書になるという問題があるが、閉架図書を死蔵図書とするかどうかは、図書館の運営と設備のありかたによるであろう。

実際建築スペースの問題から、全館開架を取りやめて閉架を導入した国際基督教大学新館は、自動化書庫を導入することで、設備の面からもこの問題をクリアーしている。自動化書庫はOPAC画面の指示をもとにスタッククレーンによってコンテナが自動的に選ばれ、該当書籍を搬送するものである。利用者が、OPAC検索画面で画面上から出庫の指示を行うと、約2分で該当書籍がカウンターに搬送されるという。図書館スタッフは書庫から運搬された図書を一定のスペースに並べ、利用者はあたかも開架図書であるかのように閲覧し、その場に返却するだけでよい。開架と閉架の敷居を低くするようなこうした設備の導入も考慮に入れるべきであろう。

6. 事務および情報管理スペースの充実と統合

情報リテラシー教育に重点を置き、学習図書館としての機能を充実すればするほど、図書館スタッフの業務内容は質量ともに増大する。こうした業務を効率的に遂行するためにも、働きやすい職場環境を整える必要がある。図書が重量のある荷物であること、電子化の進展に伴いコンピューター画面をにらんでの仕事量が増えること、高度な情報処理能力を求められる職務であること、その一方で学生や教員に対して、したしみやすい、親切なサービスを心がけなくてはならないこと。以上のような諸点は学内の他の職場にも共通する点であると思う。新図書館設立にあたってはこうした点をふまえて、他の部署のモデルケースとなりうる「働きやすい」職場環境を構築することが肝要となる。もちろんそのためには現場で働く職員の声をくみあげることが第一になされなくてはならない。図書資料を出し入れしやすい身体スケールや、デスクの配置等を考え、身

体的ストレスを軽減するための予算を惜しんではならないだろう。

7. 生涯教育支援

すでに1993年の学術審議会報告書で大学図書館公開の必要性が指摘されているが、生涯学習の時代を迎えて、地域社会に開かれた大学として地域社会の教育を支援することが、大学図書館に強く求められてきている。特に急速なI.T.化やN.P.O.、N.G.O.のような市民自らが主体である組織活動の進展をうけて、知識アクセスへの要求は増大していると考えられる。有料、無料を問わず国内外の情報データベースを日常的に利用できる環境にあり、こうしたデータベース活用ノウハウを持つ大学図書館が、地域社会に対して貢献できる可能性は大きい。いやむしろこうした貢献無しに「地域社会に評価される」大学になることは不可能であるといっても過言ではないだろう。おそらく松山大学図書館もこうした方向性を強めていくと思われるが、設備の面からも、この機能を強化する必要があるだろう。具体的には、上記の小スタジオやインターネット環境といった諸設備を、一般市民にも開放していくことが挙げられるだろう。そのためにも情報セキュリティ対策を万全のものにしておく必要がある。

さらに一般市民や新生の情報教育のために、ガイダンスルームとして使用可能な教室を図書館内に設置すること。こうした設備は新歓期のみならず、夏期休暇中の市民公開講座の際の、情報教育講座の場としても利用可能である。さらに市民公開講座を開催できる規模の教室を複数設置しておく。公開講座で紹介された書籍や各種資料を、即座に入手できる環境を整えることで、市民の学習意欲が高まり、ひいてはリフレッシュ教育の一環として大学への編入学をも視野に入れてもらえるかもしれない。この辺りの機能は、新生ガイダンスの一環と重複するものも多く、こうした機能を充実させることによって、在学生の情報リテラシー能力も強化されるであろう。

8. 建築物としての図書館

以上の議論は図書館の内部設備に話を限ってきたが、ここでは入れ物として建物の視点から、図書館を考えてみたい。立ち寄りやすく入りやすいという施設という点から、地上階には学生が集える和みのスペースを設置することが必要となるだろう。また、図書館は静謐の場所という固定概念から脱出し、周りの利用者に不自由を感じさせない程度の音量で、おしゃべりのできるスペースも必要となるだろう。実際新館増築にあたって、地階に談話しながらパソコン使用可能なスペースをもうけた国際基督教大学図書館では、これまでの図書館にはなかったグループ学習の風景が見られるようになったという。

ところで、図書館建物の外観であるが、これは個人的趣味の違いが如実になり、客観的基準が置きにくいものであ

る。従って、以下に述べるのは全くの個人的見解、趣味の露呈にすぎない。

先ほど個人的には極度の高層化には反対であると書いた。これは何よりも地域社会に密着し、松山という歴史と緑にあふれる地方中核都市の真ん中に位置するという松山大学の特殊性を念頭に置いてのことである。近年松山市も、急速に高層化しつつあるが、果たしてコンクリートの柱が乱立する都市景観が21世紀の松山にふさわしいものだろうか。すでにこうした20世紀型都市は破滅の様相を呈し始めているのではないだろうか。新宿副都心の夜間景観（ゴミだらけの、強風のふきすさぶ、無人の）、今年特に話題に上ったヒートアイランド現象。あの景観が、あの夏の暑さが松山にふさわしいだろうか？御幸山を背景に、道後を臨み、松山城を遠望する景観にふさわしい、そういう建築物こそ松山大学図書館にふさわしいのではないか。収容スペースの確保の点からは高層化は避けられないと思うが、極度の高層化（たとえば20階建て）に躊躇を覚えるのはこうした理由からである。

今現在松山大学のキャンパスに存在する建物の多くも、白茶けた無味乾燥な建物ではない。新図書館建設にあたっては、一步踏み込んで、21世紀の松山にふさわしいシンボルとなりうる建築物、中・低層でありながら機能的には十分であり、景観と調和する、こういった困難な課題を解決するモデルケースとして、図書館建築を構想してみてもどうだろう。特に都市部に付き物のヒートアイランド現象緩和に有効な、建物緑化の手法を大胆に使った建築は考慮に値すると思う。古今東西を問わず、読書に最適なのは「緑陰」である。ならば図書館が緑に彩られるのは当然だと思っただけだ。

さらに、ここで地場産業との連携もはかってみてはどうだろう。愛媛県には優秀な地場産業があるにもかかわらず、デザイン力が弱いために市場競争で不利な立場に置かれがちだとはよく言われることである。そこで、新図書館建設を、砥部焼き、製紙、和紙、タオル、絣等々、地場産業のノウハウを活かしつつ、大胆なデザイン力を発揮できる「場」にしてしまうのである。デザイン力を喚起するには、何よりもデザインを発揮できる「場」が必要である。システナ礼拝堂がなければミケランジェロも腕のふるいようがなかったであろう。

以上8点にわたって私見を述べてきたが、最初にお断りしたとおりこれは全くの独断と偏見に満ちた叩き台である。真に使いやすく、松山大学にふさわしい図書館構築のための活発な議論がわき起こることを期待したい。

参考資料

鬼頭梓、木野修造、土屋健司、長谷川紘、沖塩荘一郎、平井堯、小原誠「図書館建築のディテール」『ディテール』70、1981、

October, 彰国社, pp.57~88

戸田光昭『情報サロンとしての図書館』勁草出版サービスセンター, 1993年

長野由紀「〈新館紹介〉国際基督教大学図書館新館一ミルドレッド・トップ・オスマー図書館」『大学図書館研究』60号, 国公立大学図書館協力委員会、大学図書館研究編集委員会, 2001年2月
土屋俊「知識化社会における大学改革の中の大学図書館」『大学図

書館研究』60号, 国公立大学図書館協力委員会、大学図書館研究編集委員会, 2001年2月

原田こすえ・河村俊之「横浜市立大学学術情報センターにおける社会貢献の試みー市民への情報リテラシー教育の提供ー」『大学図書館研究』64号, 国公立大学図書館協力委員会、大学図書館研究編集委員会, 2002年3月

『発見、私の図書館利用法』

人文学部社会学科3年 池田 愛美

私の場合、図書館の利用方法で一番多いのは、講義と講義の合間の空いた時間などに自主学習の場として使うことです。特に言語科目の課題をしていることが多く、理由は辞書が何種類か置いてあるからです。私は言語ではハングルを選択しているのですが、家には韓日辞典しかないので日韓辞典が必要になったときはいつも図書館のお世話になっています。それに家でやるより図書館で勉強した方が集中できるため、最近は大体図書館で課題をしています。

それ以外の利用法として、例えばあるジャンルの本が欲しいときなど、すぐに本屋には行かず図書館で調べてから行くようにしています。本屋でいきなり本を探すのは、結構時間がかかる上に少し古くなるともう置いていないということもあるので、事前に図書館で調べておくと手間が省けるからです。

そしてもちろん普通に本も借ります。少し前までは本を借りるのはレポートなどに必要なときくらいだったのですが、最近は大学図書館といっても難しい本ばかりではなく私の好きなファンタジー系の本も置いてあることを知り、いろいろと読んでいます。J・R・R・トールキンやミヒャエル・エンデなど有名な作家のものもたくさん置いてあるので、興味のある人は覗いてみたらどうでしょう。題名は知っていたけれど読んだことはない、という本が見つかるかもしれないし、あまり本は読まないという人でも読んでみると意外と面白かった、などということもあるのではないのでしょうか。

以上が私のだいたいの図書館活用法となります。少しでも皆さんの役に立てば幸いです。

人文学部社会学科4年 中村 祐介

私は、松山大学図書館を試験勉強や友達との待ち合わせ場所として利用しています。特に新聞コーナーは、朝日、読売、毎日、日経など主要な全国紙だけでなく、地方新聞も充実しているので便利です。県外生の私にとって、地元の情報を知ることができる数少ない情報源なので、毎日利用しています。また複数の新聞に目を通すことで講義やゼミの内容が理解しやすくなり、就職試験にも役立ちます。

試験勉強やレポートの作成にあたっては、4階にある各教授の指定図書や3階の学部基本図書が、非常に便利なので利用するようにしています。特に今年から新設された学部基本図書は、各学部・学科ごとにその分野の良書が揃えられているので、どの図書を選んでいいかわからないときは、活用すると良いと思います。友達と一緒に勉強するときは、グループ学習室を利用しています。周囲を気にせず

話を進めることができるので、ゼミ仲間と勉強するときは便利です。

大学図書館というと難しい本ばかりあるように考えがちですが、ベストセラーのコーナーには話題の本や人気作家の図書も多数あるので、気楽に借りることができます。読みたい本がない場合でも、購入を依頼すれば比較的簡単に取り寄せてくれるので利用しやすいです。また図書館が開催している読書指導の会では、図書の紹介だけではなく、教員や公務員試験、資格取得のための学習方法や試験情報など、対策を専門の講師の方が教えてくれるので、興味のある講座には参加するようにしています。図書館を有効に活用することで、学生生活が便利で豊かなものになるはず

私が薦めるこの一冊

経営学部講師 菊池 一夫



ザ・ゴール

—企業の究極の目的とは何か—

エリヤフ・ゴールドラット著、三本木 亮 [訳]
ダイヤモンド社

分類番号：933.7/G/89/1

配架場所：開架（3階）

エリヤフ・ゴールドラットによるベストセラー『ザ・ゴール—企業の究極の目的とは何か』のシリーズの第1作である。物理学の研究者が書いた本であるので自然科学の類かと思いきや、企業小説の体裁をとっている。中身はといえば、工場閉鎖を突然告げられた主人公のアレックスが、恩師ジョナの教えを請いながら、仲間と共に試行錯誤を経て工場の建て直しをはかっていくというストーリーである。

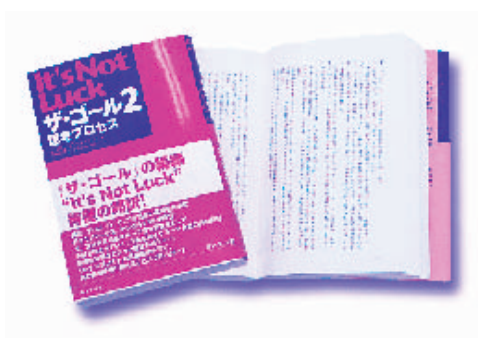
この話でのポイントはシステム改善のツールとしての制約条件（TOC）である。これは個別の過程というものよりもむしろ全体を1つのシステムと見なして、システムの目的を達成するための改善手法である。そこにはボトルネックに関心を集中し、工場全体のアウトプットを上げるためにスループットの最大化を狙うという原理が導き出されている。この考え方はアメリカの生産管理

の実務やサプライ・チェーンの研究に大いに影響を与えることになった。

本書でもう1つユニークな点はアレックスと家族との関係である。彼は家族思いであるにもかかわらず生産性の低い工場の仕事にかかりきりで、家族と過ごす時間がない。しかし、TOCというこれまでと異なる考え方を実践することで企業の生産性を上げるだけでなく、家族と共に楽しく過ごす時間を享受できるという2重の意味でのイノベーションの成果がうたわれている。

さて、生産管理のことをほとんど知らない著者のエリヤフ・ゴールドラットが物理学で学んだ発想をそこに展開するという点には驚きを感じる。しかし、物事の基本原則、知恵というものは文系・理系を問わず共通するものであるということのをわれわれは本書から学び取れるのかもしれない。

経営学部講師 溝上 達也



ザ・ゴール2

—思考プロセス—

エリヤフ・ゴールドラット著、三本木 亮 [訳]
ダイヤモンド社

分類番号：Lib/2002

配架場所：開架ベストセラーコーナー（1階）

エリヤフ・ゴールドラットによる『ザ・ゴール—企業の究極の目的とは何か』の続編である。物理学者である筆者が生産管理の分野に物理学の発想を持ち込んだことが人々に衝撃を与え、前書は世界的に大ベストセラーとなった。

前書において工場長として画期的な生産改善に成功したアレックス・ロゴは、本書では多角事業グループ全体を統括する副社長として登場する。アレックスは、多角事業グループの売却を防ぐための条件として、多角事業グループの所有する三社について数カ月以内に劇的に業績を向上させることを命じられる。彼は、恩師ジョナによって授けられた思考プロセスを用いることによって、降りかかる無理難題を次々に解決していく。

このシリーズの特長は、小説を楽しみながら何かを学ぶことができることである。本書で学ぶことができるのは、問題解決

の手段である。何か問題に直面したとき、まず図を描くことによって何が根本的な問題になっているかを明らかにする。次に、発見した根本的な問題をどのように変えたらよいかを考える。そして、それをおこなう具体的な手段を順序立てて構築する。この過程をビジネスだけでなく家庭問題なども例に取り、わかりやすく説明している。

本書は、前書と同様、ビジネス書であるにも関わらずたくさんの人に読まれている。小説仕立てで読みやすいことが原因であろう。しかし、ここに一つ疑問に感じる点がある。果たして本書を読んだ人のうちどれだけが、ここで説明されている思考プロセスを実践しているであろうか。われわれがむしろ学ぶべきは、問題を認識したらすぐに紙とペンを取る、そのアレックスの姿勢であるのかもしれない。

——統計データで見る松山大学図書館——

図書館利用状況推移表

※貸出冊数は研究室分を除く

	入館者数	貸出冊数	閲覧冊数		
			開架	閉架	小計
1997年度	188,676	35,736	77,554	12,774	90,328
1998年度	222,733	44,273	85,839	13,416	99,255
1999年度	217,672	47,807	82,681	11,458	94,139
2000年度	220,574	49,377	73,299	12,132	85,484
2001年度	222,166	55,394	82,063	12,035	94,098
2002年度	128,446	28,979	39,802	6,256	46,058

『相互協力』利用件数推移表

	本学からの申込み件数			他館からの受付け件数			合計
	文献複写	相互貸借	所蔵調査	文献複写	相互貸借	所蔵調査	
1997年度	403 (60)	277 (56)	73	83 (10)	7 (0)	22	865
1998年度	587 (52)	321 (69)	50	124 (15)	12 (0)	20	1,114
1999年度	338 (43)	175 (23)	25	242 (15)	2 (0)	10	792
2000年度	363 (41)	140 (15)	2	451 (35)	39 (8)	9	1,004
2001年度	268 (23)	177 (13)	3	499 (51)	52 (9)	12	1,011
2002年度	277 (29)	122 (15)	0	429 (44)	21 (7)	16	865

※但し、〔 〕内は謝絶の件数で、2002年度は9月末現在
1999年9月よりNACSIS-ILLを開始した。

【編集後記】

今号からは、前号で一応終了した「資料検索シリーズ」に代わって、今後の松山大学図書館を見すえて、大内先生、松井名津先生に『理想の図書館』というテーマで、今後の大学図書館として進むべき方向というもののお考えをお示しいただいた。お二人には、選考委員会の委員として以前から図書館、特に開架図書の充実にご尽力をいただいているので、本当に感謝を申し上げたい。

その内容として、大内先生は充実した開架図書を並べること、図書館が文化・情報を交流・発信する場となること、図書館が地域文化の発展に貢献していくことが重要であるとしている。

つぎに、松井先生が設備の面から、情報コンセントの整備、A.V.室、L.L.教室（ブース）の設置、マルチメディアに対応した小スタジオの設置、余裕のある書架スペースと個別キャレルの設置、開架と閉架の有機的連関（自動化書庫の例）、

事務及び情報管理スペースの充実と統合、生涯教育支援、建築物としての図書館等を取り上げている。

あらたに新シリーズとして、学生による図書館における「有効利用法」を学部ごとに掲載することにしたもので、今回は最初に人文学部生2名による図書館利用の薦めを掲載している。このコーナーが少しでも学生の図書館の利用促進につながればと思っている。

また、『私が薦めるこの一冊』のコーナーは、くしくも同じタイトル「ザ・ゴール」の上・下巻となっている。しかし、上・下巻では中身がまったく違っており、どちらの本も内容的にすばらしいとの推薦者の言葉である。是非ご熟読願いたい。

前半期における図書館活動としては、情報リテラシー教育の一層の充実、あるいは図書館見学、読書指導会等が活発に行われた。図書館として今後、全学部あるいは上級生へ範囲を広げて行く等の一層の充実を図っていかねばならない。

松山大学図書館報 No.30 2002年11月1日発行

編集・発行 松山大学図書館

〒790-8578 松山市文京町4番地2 TEL (089) 925-7111 (代)

ホームページアドレス <http://www.matsuyama-u.ac.jp>

E-mail: mu-libs@gc.matsuyama-u.ac.jp